



「隣人を助ける原理」に基づいた 小規模分散経済へ転換せよ

昨年来のコロナ禍は、これまで日本が進めてきた効率性重視の社会経済体制の転機となりうる——森永卓郎氏はそう指摘する。一極集中の大都市が新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）拡大の直撃を受け、都市の経済活動に依存する地方が疲弊していく。そうした経済社会のあり方をどう変えていけばいいのか。かつて森永氏の下で働いた片岡剛士審議委員との対談で、新型コロナ後の社会像を熱く語る。



日本銀行政策委員会
審議委員
片岡剛士
KATAOKA Goushi

1972年愛知県生まれ。96年慶應義塾大学商学部卒業後、(株)三和総合研究所に入社。2001年慶應義塾大学大学院商学研究科修士課程修了。05年(株)UFJ総合研究所経済・社会政策部主任研究員。06年三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)経済・社会政策部主任研究員。16年三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)経済政策部上席主任研究員。2017年7月より日本銀行政策委員会審議委員。



経済アナリスト・獨協大学経済学部教授
森永卓郎
MORINAGA Takuro

1957年東京都生まれ。東京大学経済学部卒業。日本専売公社(現・日本たばこ産業(株))、経済企画庁総合計画局、(株)三和総合研究所(現・三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株))などを経て、現在獨協大学経済学部教授。専門分野はマクロ経済、労働経済、計量経済。『年収300万円時代を生き抜く経済学』(光文社)、『なぜ日本経済は後手に回るのか』(KADOKAWA)、『グローバル資本主義の終わりとガンディーの経済学』(集英社インターナショナル)など著書多数。



エコノミストの役割は「一歩先」を示すこと

片岡 私は一九九六年に大学を卒業後、森永さんが在籍しておられたシンクタンクに入りました。内定の連絡は森永さんからいただきました。

『片岡さん採用です、細かいことは後で』と。すぐに切られたことを覚えています。

森永 そうでしたか。私は覚えて

いませんが(笑)。とにかく当時はがむしゃらに働いていました。

片岡さんも入社早々から、鍛えられたんじゃないかと思えます。

片岡 当時、右隣の席に座る森永さんの視線をたえず感じながら仕事をしていました(笑)。「夜もふけてからが仕事の本番だ」という勢いで働いていましたね。働き方改革が叫ばれる昨今からすると隔世の感があります。

私自身、その頃を振り返ってみると入社して三年ほどで一五キロくらい痩せました。週末は平日の疲れを取ることに専念し、月曜になんとか会社に行くということの繰り返し。入社して最初の何年かは夢中で働くことが、その人の潜在能力の拡張につながるんだろうなと感じます。

ところで、森永さんや私がいるエコノミストの世界について伺いたいと思います。エコノミストの草分け的存在である高橋亀吉の言葉に、「変化を把握し、先行きを提示できる人こそがエコノミストだ」という趣旨のものがあ

ります。私が森永さんの下で働いていた時、他の方との違いという意味で感じていた点の一つは、森永さんはビジョンを提示される、ということだと思います。将来こんな社会になるとか、これから構造変化が起こるだろうとか。たとえば『年収300万円時代を生き抜く経済学』という著書を二〇〇三年に出版され、サラリーマンの平均年収は三〇〇〜四〇〇万円にまで落ち込むと予測されました。森永さんは、そうした世の中の一歩先を見通すオリジナリティーを持つていらつしやると感じます。

森永 私は日本経済研究センターに一九八二年から八三年まで在籍していました。賃金と所得分配と食料品産業担当でしたが、それまでと同じように、ただ賃金の伸びの予測を出してもつまらないと思っていました。そこで、一人図書室にこもって「賃金構造基本統計調査」と格闘しているうちに、あることが分かりました。高度成長期に縮小していた格差が、石油ショック以降、また大き

く広がっていたのです。企業規模間や男女間だけでなく職業間、学歴間、職位間まで、ありとあらゆる格差が高度成長の終わりとともに拡大に向かっていました。日本経済研究センターは経済予測をする機関ですので、賃金構造を分析するのは本来の仕事ではないのですが、これは何だろうと疑問に思いました。私は、関係ないことに手を出すのが好きなんです(笑)。予測の報告書の編集権を握っていたので、自分が分析した賃金格差のレポートを、その報告書に入れ込みました。

片岡 そういう統計などから何かオリジナリティーを見出す観察眼が、他のエコノミストとは全然違うのかなと感じます。

森永 今申し上げた賃金格差については、仏経済学者のトマ・ピケティが、二〇カ国以上の税務統計データなどを二〇〇年分にわたり観察して、その結果を『21世紀の資本』として刊行し、世界的なベストセラーになったことは記憶に新しいところです。私

は、彼よりも約二〇年早く、同じような作業をやったのですが、対象が日本だけで、期間も二〇年と短かった。もうちょっと拡大してやっておけばという気持ちはありますが、逆にピケティは、それだけ大規模に賃金格差を調べたところに独自性があると言えるのかもしれません。

また、いくら独自性のある良い意見を持つていても、さまざまなしがらみの中でそれを世の中に表明できないということもあります。私は昔から人と群れません。群れるとしがらみが生まれ、言うべきことが言えなくなってしまうからです。言うべきことを言える環境を自分で確保することも、この世界では大事だと思います。

マルクスが見通した世界 ガンディーが唱えた社会

片岡 昨年来、新型コロナの影響で世の中の雰囲気は一変しました。先ほどから話題に出ている格差についても、先行きを懸念する声があります。経済の先行きをど

う見ていらっしゃいますか。

森永 「K字回復」するだろうと見ています。その字のごとく、強いところは強くなり、弱いところは後退する。二極化です。ちょうど一〇〇年前、スペイン風邪の第三波に襲われた後の日本と同じような状況、すなわち、財務基盤が比較的強い大企業が、体力の相対的に弱い企業のマーケットに食い込み、中小零細企業は疲弊していく、という状況になることを懸念しています。

社会も、新型コロナの影響を受け変わっていくでしょう。事実、スペイン風邪がやった一〇〇年前の日本では庶民の暮らしが大きく変わりました。スペイン風邪がはやる前は、庶民はみんな着物を着て、半紙に筆で文字を書いていました。それが、スペイン風邪を境に、急速に服装が和洋折衷になった他、文字を書くのも、筆から万年筆や鉛筆になっていきます。万年筆のパイロットやトンボ鉛筆、スケッチブックのマルマンといった企業が創業したのは、こ

の大正期です。社会面でも、感染症を機に変化が起る可能性があると思います。

片岡 その変化のキーワードは何でしょうか。

森永 私は、「大規模から小規模へ」、「一極集中から分散へ」、そして「中央集権から分権へ」という三つのトレンドが生まれるだろうと考えています。戦後、日本は効率性を重視し、経済面では大規模化、一極集中を進め、また政治面では中央集権化を進めてきました。今回の新型コロナが、これまで進めてきたこうした流れを立ち止まらせているように思えてなりません。都市化、格差の拡大、環境破壊、こうした問題をこれ以上放置できない。まさにわれわれは岐路に立っているのではないかと。マルクスは、『資本論』において、資本主義が暴走し、地球環境と庶民の暮らしを破壊する経済の姿を憂えていた。それが最近、自分の中でふに落ちるようになりました。

地球環境と人の暮らしを守るた

め、これまで推し進めてきた「大規模・集中・集権」から脱却し、「小規模・分散・分権」の方向へ経済社会も生活様式も転換しないと、これから先、日本は立ち行かなくなるかもしれない。実際、一九九六年から二四年も続いていた東京圏への転入超過が、昨年五月から、同年六月を除き、転出超過となつています。潮目が変わりつつあります。

私は、その潮目の変化が「ガンディーの経済学」に基づく方向に向かえば、新型コロナ後の世界は、決して悪いものではないと考えています。インド独立の父と言われるガンディーが唱えたのは「近くの人が近くの人を助ける」という「近隣の原理」でした。大規模な工場を誘致しても、そこで働く人しかお金を得られません。それよりも、近所の人を作った農産物を食べ、近所の人を作った服を着て、近所の大工さんが建てた家に暮らす。そうすれば地域に雇用が生まれて、経済が回り始める。小さな経済の輪を広げることが、新型コ

ロナから脱却する切り札になる。私はそう信じています。

晴耕雨読の暮らしから 地域経済の輪ができる

片岡 ガンディーが唱えたような小規模分散型の社会への変化を促すために、国や自治体は何ができるでしょうか。

森永 そんな社会は夢物語と思われるかもしれませんが、実現しているところがあります。富山県の舟橋村です。この三〇年間で人口が倍増し約三千人が暮らしています。なぜ人口が急増したのか、村長さんに聞くと、「文化振興の政策を最優先にやった」と。例えば、人口の割を収容できる大きなホールを建てた。過剰な箱物に見えますが、住民の教養レベルが高いので、文化的な催しをすると満席になるのだとか。私も舟橋村に講演に行きましたが、びっしり満員で、講演の後の住民の皆さんからの質問や問題意識の質は非常に高い。他にも、とてつもない蔵書数を誇る図書館を建てました。

そうした文化振興政策と並行して、村は耕作放棄地を借り上げてサラリーマン世帯などに貸し出す政策もしました。しかも単に貸し出すだけではなく、プロの農家の指導つきです。多くの住民は車で一五分の富山市まで働きに出ています。そして、自宅に帰って農作業で汗を流し、雨が降ったら図書館で読書にふける。文字通り晴耕雨読です。村にすれば、都市で稼ぐ人たちが、自然豊かな生活環境の中でずっと住み続けてくれるから、とくに産業がなくても経済を十分回せるんです。

片岡 森永さんご自身、都心から離れたところで暮らし、野菜作りなどをしておられます。実際の農作業のご経験も踏まえ、個人主体でも生産や消費の小規模分散化を図ることができると思われませんか。
森永 日本の農業について言えば、これまで大規模化一辺倒でしたが、私は「自産自消」を生活の中に組み込んでいくことを考えた方がいいと思っています。それぞれ

れの家庭で自分の食べるものは自分で作る、という生活様式です。野村総合研究所の予測によれば、二〇三五年に全国の空き家率が三〇%を超えると。そうすると、日本人は今よりもかなり広い家、あるいはこれまで家があったところを畑にするということが可能になるということです。その結果、庭付きの家ではなく、「家の前に畑がある」という生活を標準型として考えることもあながち夢物語ではありません。

私は三〇坪ほどの畑を借りて農作物を作っています。農作業は本当に大変ですが、そうして自産自消すれば、自分で自分作ったものを食べられる喜びが得られるだけでなく、災害のリスクにも強い。大地震に襲われても私の家族は全く困りません。畑を掘れば芋もニンジンも大根もあるので。 **片岡** 昔から森永さんは人生を楽しんでおられましたか、今のお話もつながっているように感じます。

森永 ワクワクドキドキしながら

生きる、そのベースの中で楽しいことができればいい。自分で農業をやって実感しています。ただし、楽しい仕事はお金になりません。農業では一円も稼いだことがありませんし、実は童話作家になる夢も抱いて企画を出版社に送り続けていますが、箸にも棒にもかかりません。自分で経営する博物館に至っては大赤字です。それでも、いろいろ挑戦することは、やはり楽しい。自分で作った物を食べ、近くの人と助け合い、楽しいことに打ち込む。私が実践しているそういう生き方が、コロナ後の一つの方向性ではないかと思っています。

片岡 コロナ禍はわが国を含む世界を支えてきたシステム・仕組みの脆さをあらわにするとともに、変革へのきっかけを与えているとも言えます。その変革を良いものにする必要がありますね。本日は有意義なお話、ありがとうございます。

※本対談は昨年十月二十一日(水)に行われたものです。